

「それぞれの子どもらしさを求めて」より (五)

名古屋市立大高幼稚園



バレエ教室

やえ子・よしみのふたりが、遊戯室でバレエボールをしていた。教師をみると

「先生、バレエ教室の先生になって？」

というのでバレエ教室の先生になってしばらくいっしょに遊ぶ。

「きょうのバレエの練習はこれでおわります。またあすやりましょう」

といてままごとコーナーへいった。ままごとコーナーで食事しているとやえ子が

「こちらに磯川先生はいらっしゃいますか？ もうバレエ教室が始まるんですけれど」

といて呼びにきてくれた。そして

「先生新しい生徒ですけれど、ご紹介します。きみえさんというのです」

といてやえ子がきみえを紹介してくれました。

「じゃーバレエ教室へいきましょう」

といて、ままごとの家を出た。やえ子ときみえは、バレエ教室が休憩になってから、小鳥と遊んでいたよしみを誘いにいった。

「よしみちゃんバレエ教室が始まるからいくわよ」

と誘ったがよしみは小鳥と遊ぶことがおもしろくなったのか動かない。

きみえが、「いかなければいけない」と強くいたので泣き出してしまった。教師が

「よしみちゃんは、今小鳥さんと遊びたいんだって」

といて、そのままよしみをおいてバレエボールごっこを始めた。バレエ教室がおわると、やえ子・きみえが教師のあとを追ってきて、

「よしみちゃんは長野へ行ってるもんですから、当分の間バレエ教室を休みます。ずっとできませんのでよろしく」

といて出した。よしみが小鳥とあそんでい

る状態をこのように表現する。そしてバレエ教室によしみがもどってきた時、いつでもうけ入れてあげられる姿勢であることがうかがえる。しばらくしてよしみがやってきた。

「あらよしみちゃん、長野からお帰りますか」

とやえ子が声をかけた。しかしよしみは自分が長野へいったことになっているということとはしらないので、きょとんとした顔で「お花の仕事してたの」という。

◇ ◇ ◇

「バレエ教室が始まります」といわれた教師がいかがるを得ないようにした、そのかわり方のうまさにおどろいた。また、やえ子・きみえとよしえの、なんともいえないほほえましい暖かみのあるトンチンカンな会話に、教師ひとりおかしさをこらえる。

(五歳児 六月十八日)



### 魚とわに

絵本の付録をみつめて、けんた・ちから・あかね・かなの四人が、ばくばく口があくような魚を作った。少しおくれで登園してきたまさが

「先生、けんたちゃんやちから君の作っ

ているのなに？ どこにあるの？ ほくもちょうだい。ねえ」といつてきた。

「あれは絵本の付録で四つしかないの」といつても納得がいかないらしく、いつまでも教師のあとを追いかけてくるので切れ端の紙で作ってやる。喜んでそれを持ち歩いて遊んでいた。

しばらくすると

「もうひとつ作って」

といつてきた。

「えっ、まだいるの？」

「だってばくばくして、戦わせるんだもん目や口は自分がかくからね」といつ、切れ端の紙でもうひとつ作ってやると、満足した顔で

「ありがとね」

といつ行つてしまった。かたづけの時、

「ほくね、ふたつあったんだけど、ひとつひさおくんにあげたよ」

といってきた。

◇ ◇ ◇

教師にたのんでせっかくふたつ作ってもらい、自分で目鼻をかきたのしんでいたのに、ひとにやっってしまうとはと教師は思った。しかし、自分でじゅうぶん遊んだあとだから、友だちがほしいといえは、素直な気持ちであげることができたのだろう。

「もうひとつ作って」といってきたとき、「ひとつにしておきなさい」と拒否しなくてよかったと思った。このようすをみていたせきおが、「先生、ほくわにがほしい。作って」といってきた。せきおが教師に自分の欲求をことばで、こんなにはっきりいつてきたことがなかったのうれしくなった。同じ紙がなかったの、色紙で作ってやる。せきおはわにだと思っっているの、教師の作った魚の口をあぐりあけて、ぎざぎざの歯をつけていた。同じものをみて

も、子どもそれぞれにイメージがことなり自分のイメージのように作ったりつけ加えたりしている。概念にとられない柔軟な思考力・想像力をもっているこの時期を、大切に創造の世界を広くしてやりたいものである。  
(五歳児 六月十九日)

### 色もよのついた靴

はな子が教師のそばにきて、小さい声で「わたし、新しい靴はいてきたよ」といいながら靴をみせた。

「そう大事にしなくてね。きょう、いさお君も新しい大きい靴をはいてきたの。いっしょね」

「いさお君、はな子ちゃんもきょうから新しい靴なんですって、見せてあげて」ふたりで見せ合い、色やもようなどを比べていた。降園の身仕度をしている時、またその靴を教師に見せにきた。

「お花のもようだ」という。

◇ ◇ ◇

どうして、はな子が再び靴をみせにきたのだろうか？

「お花のもようだよ」

ということばを聞いて、はっと思った。

はな子は、きれいな花がついている靴であることを、認めてほしい、教師にも共感してほしいという気持ちで二度も見せにきたということに気づいた。

「きれいな花のもよのついているすてきな靴ね」

ということばを、先にいってやるべきだったと反省した。つい教師のことばはお説教になってしまった。

「そう、だいにしなくては……」とか「よごれないように……」とかいってしまふ。  
(五歳児 六月二十一日)